

■アメリカの友人のみなさん。世界の友人のみなさん。こんにちは！

私は日本の参議院議員の吉良よし子です。この場で発言できることに心から感謝します。2年前、2013年の原水爆禁止世界大会 in 長崎でアメリカのみなさんに出会い、世界中で核兵器廃絶の運動が広がっていること、それが5年前のNPTでの前進につながっていることに確信を持ち、勇気をもらいました。そのお礼と熱い連帯の気持ちを始めに申し上げます。

■日本の安倍首相は、私の帰国後、4月26日から訪米し、オバマ大統領に会うと言います。しかし、残念ながら被爆国にふさわしい行動をとることは期待できそうにありません。アメリカの「核の傘」に守ってもらうため、核兵器禁止条約の交渉開始も言えないのです。唯一の戦争被爆国の首相としてあまりにも恥ずかしい態度だといわざるをえません。ですから私が先に、ここNYに来ました。

私は唯一の戦争被爆国の国会議員として、改めてこの場で申し上げます。日本の国民、若者、そして被爆者をふくむ圧倒的多数の願いは「核兵器廃絶」です！

■私は32歳です。原爆を体験していませんし、被爆二世でもありません。でも、原爆＝核兵器の恐ろしさを知ることはできました。たとえば、「ひろしまのピカ」「まちんと」「ピカドン」などの絵本から。そして、もうひとつ。被爆者の方のお話です。忘れられないのは、ある被爆者の方が、自ら傷つき逃げる途中「塀に押しつぶされ生き埋めになっていた近所のおばさんと子どもたちの『助けて下さい』という声に答えられなかった。見殺しにした。今でも悔やんでいる。」と話していたことです。自分自身、傷つき苦しんでいても、なお、他人を助けたいと思えるのか。そう思っても、なす術もなくその手を振り払わざるを得ない状況にあったというその無念の感情はいかばかりか。想像し、私は言葉を失いました。

■一瞬で人も町も焼き尽くし、放射能により何十年も原爆症で人間を苦しめて、次の世代にまで影響を及ぼすと言われている核兵器。その非人道性は、身体的な問題にとどまりません。被爆者のみなさんは、忘れられないその時の地獄のような光景やにおい、そして、自分だけが生き残ったという罪悪感、そういう心の痛みを抱え続けています。だからこそ「ノーモアヒロシマ」「ノーモアナガサキ」「苦しむのは私たちが最後に」と訴え続けているのです。私は、この被爆者の思いを、世界中に、そして、彼らの訴えを直接聞けないだろう次の世代にも伝え続けたいのです。

■いま、私たち日本の若者も被爆者のみなさんと行動し、署名を集め、行進に参加しています。アメリカの人々、世界の人々と力をあわせて、次の世代に「核兵器のない世界」を手渡すことこそが私たち日本の若者と被爆者の願いです。

■「核兵器のない世界」のために今なすべきこと。それは、できるところから段々に、ではなく、正面から核兵器禁止・廃絶の交渉をすることです。核兵器で相手を脅して自分を守るという「核抑止力」論をのりこえて、核兵器禁止条約の交渉開始の合意をすべきです。そのためにも世界の世論を結集すること、とりわけ被爆国の世論が重要です。

■今年2月には、日本の国会において、わが党＝日本共産党の山下書記局長が、いまだに日本政府が核兵器禁止条約の交渉開始を求める国連総会決議に棄権し続けていることを批判し、条約の交渉を開始するよう強く求めました。

■私も、世界のみなさんとともに核兵器のない世界のために力をあわせる決意を申し上げ、この場でのスピーチとします。ノーモアヒロシマ！ノーモアナガサキ！ノーモア核兵器！